

# 『明治三十八家絶句』 卷上 (一)

高津 孝

『明治三十八家絶句』三卷は、国文学研究資料館所蔵本によ

ると、封面上欄「辛未初春鼎鑄」下段「溪琴 雲嶺 亥軒 朴

齋 梅東 佛山 黄石 青村 湖山 翠雨 春帆 鐵心 枕山

春濤 船山 靜逸 小湊 松塘 鳳陽 精所 秋村 學齋

聽秋 摩齋 天江 香谷 蓼處 汚堂 林外 水香 松陽 香

雨 石埭 大受 紅蘭 天章 梅塢 即山 明治三十八家絶句

平安書肆 文政堂 擁萬堂合梓、刊記に「明治三年庚午四

月 官許 書 肆 東京日本橋通一丁目 須原茂兵衛 同所二

丁目 山城佐兵衛 大阪心齋橋南一丁目 松村九兵衛 同筋北

久太郎町 浅井吉兵衛 京都寺町通五條上 藤井佐兵衛 同町

額田正三郎」とあり、明治三年（一八七〇、庚午）四月に官

許を得て、明治四年（一八七一、辛未）一月に、京都の書肆文

政堂と擁萬堂の共同出資で、刊行されたものである。本書には

三十八人の詩人、七七五首を収める。最多は三八首の春濤、最

少は一二首の春帆、摩齋である。国立国会図書館所蔵本では、

刊記に「皇都 書林 藤井文政堂 寺町通五条上ル町 山城屋

佐兵衛」とあり、後刷りであろう。上巻巻頭に、山本秀夫（弦

堂）<sup>1</sup>の、明治二年（一八六九、己巳）十二月の序が付され、

1 山本弦堂（一八三二—一八七三）、名は實慶、字は秀夫、幕末の医者、儒学者。江

戸後期の著名な本草学者山本亡羊の三男である。明治元年閏四月典藥寮官人から

大学寮講師となり、明治四年六月東京で、太政官権少史となり、修史館を兼務

した。中島民之介『山本亡羊先生小伝』（舊京都博物館、一九〇九年）による。

下巻巻末に中村棼（確堂）<sup>2</sup>の跋「題明治三十八家絶句」が付  
されている。山本弦堂序に「書賈擁萬堂主人輯當今諸家之詩、  
名曰明治三十八家絶句」とあるので、編者は擁萬堂主人額田正  
である。額田には、この他に編著として『安政三十二家絶句』  
三卷（安政四年（一八五七）序刊）がある。

本訳注は、平成三〇年度前期鹿児島大学大学院人文社会科学  
研究科国際文化論専攻「中国文学特論」において学生とともに  
講読したもの的一部である。参加者は、吉田隆、紀艶、楊光宇、  
高欣妍の三名である。テキストは国文学研究資料館所蔵本に拠  
り、書き下しはその訓点を参考にした。

溪琴 十九首

溪琴菊池先生<sup>3</sup>。名は保定、字は子固、別號は海莊。紀伊の  
人。寛政十年（一七九八）戊午の生まれ。

2 中村確堂（一八三二—一八九七）、名は棼、字は士訓、通称は鼎五、号は確堂、  
近江水口藩士山形正陽の子で、水口藩儒中村栗園の養子となる。幕末期、勤王  
の志士と交流し、長州戦争に従軍、戊辰戦争では禁裏を警護、維新後は、学校  
督学、埼玉師範学校校長などを歴任した。『国書人名辞典』による。

3 『日本人名大辞典』菊池海莊…さくちーかいそう…一七九九—一八八一、  
江戸後期—明治時代の漢詩人。寛政一一年九月二五日生まれ。生家は紀伊有田  
郡（和歌山県）の豪商。砂糖問屋の江戸店をつぐ。大窪詩仏にまなび、広瀬旭  
莊らとまじわる。天保年間に郷里で窮民救済につくし、幕末には海防策を建白、  
農兵を組織した。明治一四年一月一六日死去。八三歳。本姓は垣内。名は保定。  
別号に溪琴。詩集に「海莊集」、著作に「国政論」など。松下忠「菊池海莊の  
詩及び詩論」（『和歌山大学文学部紀要人文科学』第十号、一九六〇年）によ  
れば、菊池海莊の詩集は五点存在する。『秀餐樓初集』（秀餐樓集）五卷（文政  
一二年（一八二九）刊、文政一一年までの詩を収録）、『溪琴山房詩』（溪琴山  
房集、溪琴山人二集）六卷（天保八年（一八三七）刊、文政一二年から天保七

東北平定歌五首 其一 東北平定<sup>4</sup>の歌 五首 其の

一<sup>5</sup>

恩露惠風洗戰塵 恩露<sup>6</sup> 惠風<sup>7</sup> 戰塵<sup>8</sup>を洗ふ  
 歡呼起舞億兆人 歡呼<sup>9</sup> 起舞<sup>10</sup> 億兆<sup>11</sup>の人  
 至尊遙自紫宸望 至尊<sup>12</sup> 遙に紫宸<sup>13</sup>自り望む  
 北道花開千里春 北道 花開く 千里の春(上平十一眞・塵、  
 人、春)

年までの詩を収録、『海莊集』(溪琴山人三集)三卷(嘉永二年(一八四九)刊、天保八年から弘化四年までの詩を収録)、『溪琴山人第四集』(写本一冊、嘉永元年から嘉永三年までの詩を収録)、貴志康親編『海莊遺稿』(昭和五年刊、菊池海莊先生建碑會)がある。『海莊遺稿』には、『明治三十八家絶句』全体を評した「書明治三十八詩後」十二首を収める。

4 戊辰戦争を指す。戊辰戦争とは、慶応四年(一八六八)一月の鳥羽・伏見の戦いから明治二年(一八六九)五月の箱館戦争までの戦争をいう。慶応四年の干支が戊辰であることから名付けられた。

5 『海莊遺稿』では、「恩露惠風」を「慈雨仁風」に作り、「億兆人」を「日東民」に作る。

6 恩惠、恩沢。『三國演義』第九一回「我當奏之天子、使爾等各家盡露恩露、年給衣糧、月賜慶祿。」

7 仁愛、仁政の比喩。漢・張衡『東京賦』「惠風廣被、澤洎幽荒。」

8 戦場の塵埃。戦争をさす。唐・司空圖・河湟有感詩「一自蕭關起戰塵、河湟隔斷異鄉春。」

9 楽しげに声を上げる。『東觀漢記』王霸傳「賊眾歡呼、雨射營中。」

10 立ち上がって踊る。『國語』晉語二「驪姬許諾、乃具、使優施飲里克酒。中飲、優施起舞。」

11 極めて多数。『書』泰誓中「受有億兆夷人、離心離德。」

12 皇帝の代称。『漢書』西域傳上・罽賓國「今遣使者承至尊之命、送蠻夷之賈。」

13 宮殿の名、天子の居所。唐・杜甫・冬至詩「杖藜雪後臨丹壑、鳴玉朝來散紫宸。」

東北の反乱を平定し終わり、天皇陛下の恩徳は露や風のように戦いの塵埃を洗い流したので、我が国のすべての人々は歓呼し、立ち上がって舞い踊った。天皇陛下が京都の紫宸殿からはるかに眺められると、北へ向かう道は千里の彼方まで花ひらく春である。

其の二<sup>14</sup>

悠久神威流不休 悠久 神威<sup>15</sup> 流て休まず  
 北辰星下布皇猷 北辰<sup>16</sup> 星下 皇猷<sup>17</sup>を布く  
 即今御府新圖籍 即今<sup>18</sup> 御府<sup>19</sup> 新圖籍<sup>20</sup>  
 添見蝦夷十一州 添へ見る 蝦夷 十一州(下平十一尤・休、猷、州)

歴史ある皇室の威光は過去から現在まで流れて已むことは無い。天の北極星のもと、天皇の教化は広範囲に広がっている。

14 『海莊遺稿』では、「流不休」を「振五洲」に作り、「布皇猷」を「定皇猷」に作る。

15 神霊の威徳。『雲笈七籤』卷九六「叩商百獸舞、六天攝神威。」

16 北極星。『論語』為政「子曰、為政以德、譬如北辰、居其所而眾星共之。」

17 帝王の謀略或いは教化。南朝・梁・沈約・齊太尉文憲王公墓銘「帝圖必舉、皇猷諧煥。」

18 今日、現在。唐・高適・送桂陽孝廉詩「即今江海一歸客、他日雲霄萬里人。」

19 帝王の倉庫。『史記』平準書「胡降者皆衣食縣官、縣官不給、天子乃損膳、解乘輿駟、出御府禁藏以贍之。」

20 地圖と戸籍。領土と人民を指す。『荀子』榮辱「循法則、度量、刑辟、圖籍、不知其義、謹守其所、慎不敢損益也。」楊倞注「圖謂模寫土地之形、籍謂書其戶口之數也。」

ただいま、政府には新しい地図と戸籍が備えられ、北海道（十一州・渡島国、後志国、胆振国、日高国、石狩国、天塩国、北見国、十勝国、釧路国、根室国、千島国）が加わったのを合わせることができる。

### 其の三<sup>21</sup>

鎮府名存九百年	鎮府	名存す	九百年
斷碑零落臥荒烟	斷碑 <sup>22</sup>	零落 <sup>23</sup>	荒烟 <sup>24</sup> に臥す
山河今日復依舊	山河	今日	復た舊に依る
恩露春深韎韐天	恩露	春深し <sup>25</sup>	韎韐 <sup>26</sup> の天（下平一先…年、烟、天）

陸奥国の鎮守府（七四二年多賀城創建、八〇二年に胆澤城に移る）の名前は九百年後の今も伝わっているが、天平宝字六年（七六二）の年号を記した多賀城碑（日本三古碑の一つ）は残欠して荒れ果てた場所に打ち捨てられている。当時の山河は今

- 21 『海莊遺稿』では、「零落」を「苔蝕」に作る。
- 22 残欠した石碑。宋・黃庭堅・病起荆江亭即事詩之五「楊綰當朝天下喜、斷碑零落臥秋風。」
- 23 残欠して不全な様。宋・曾公亮・進唐書表「文采不明、事實零落。」
- 24 荒野の霧。荒涼とした地域。唐・陳子昂・晚次樂鄉縣詩「野戍荒煙斷、深山古木平。」
- 25 春が盛りである。唐・儲光義・釣魚灣詩「垂釣綠灣春、春深杏花亂。」
- 26 中国古代の少数民族名。周代では肅慎、漢・魏では挹婁、北魏では勿吉、隋・唐では靺鞨、五代では女真と呼ばれた。松花江、牡丹江流域及び黒龍江下流から、東の日本海に居住していた。ここでは北方の異民族を指す。『隋書』東夷傳・靺鞨「靺鞨、在高麗之北、邑落俱有酋長、不相總一。」

も変わらないが、東北の平定により、天皇陛下の恩沢は春盛りの異民族の地にも到達することになった。

### 其の四<sup>27</sup>

海天初曙曉噉紅	海天	初曙 <sup>28</sup> で	曉噉 <sup>29</sup> 紅し
十萬旌旗方向東	十萬	旌旗 <sup>30</sup>	方に東に向ふ
蕩滌沍寒千古雪	沍寒 <sup>31</sup>	千古 <sup>32</sup> の雪を蕩滌 <sup>33</sup> し	
山河喜色浴春風	山河	喜色 <sup>34</sup>	春風に浴す（上平一東…紅、東、風）

海の水平線に、夜明け近い頃、赤い太陽が登るように、十万の大軍がちょうど今東に向かった。極寒の中、千年もの間降り積もった雪を溶かし、山河は喜びにあふれ、春風に吹かれている。

- 27 『海莊遺稿』では、「初曙」を「新霽」に作り、「十萬旌旗」を「鳳駕霓旌」に作り、「蕩滌沍寒千古雪」を「一洗千年冰雪色」に作り、「喜色」を「草木」に作る。
- 28 朝日。唐・殷堯藩・金陵上李公垂侍郎詩「海國微茫散曉噉、鬱蔥佳氣滿乾坤。」
- 29 軍旗。軍士を指す。唐・王昌齡・青樓曲之一「白馬金鞍從武皇、旌旗十萬宿長楊。」
- 30 寒気の凝結すること。極めて寒冷なこと。『左傳』昭公四年「其藏冰也、深山窮谷、固陰沍寒、於是乎取之。」沍、一本作「沍」。
- 31 遙か古代。北魏・酈道元『水經注』睢水四「追芳昔娛、神遊千古、故亦一時之盛事。」
- 32 洗い流す。『古詩十九首』東城高且長「蕩滌放情志、何為自結束。」
- 33 喜びの様子。『禮記』文王世子「今日安、世子乃有喜色。」

其の五<sup>34</sup>

何者狡童抗六師 何者の狡童<sup>35</sup> 六師<sup>36</sup>を抗ふ  
檻車千里命如絲 檻車<sup>37</sup> 千里 命 絲の如し<sup>38</sup>  
罪臻大辟皆減死 罪 大辟<sup>39</sup>に臻るも 皆 死を減ず<sup>40</sup>  
不似唐家征蔡時 似ず 唐家<sup>41</sup> 蔡を征する時に<sup>42</sup> (上平四支・  
師、絲、時)

一体どういう狡猾頑迷な諸侯が、天皇陛下の軍隊に逆らおうとしたのか。彼らを護送する車は千里も続き、その命は極めて危うい。罪は死刑に当たるが、皆死一等を減ぜられた。その有様は、唐代の憲宗皇帝が吳元濟を蔡州で打ち取った時に、斬首

34 『海莊遺稿』では、「狡童」を「頑童」に作り、「皆減死」を「猶寛宥」に作り、「不似」を「不做」に作る。

35 『詩』鄭風・狡童は、公子忽を風刺した作品。後に「狡童」で狡猾頑迷な君主を指す。『史記』宋微子世家「〔箕子〕乃作『麥秀之詩』以歌詠之。其詩曰……麥秀漸漸兮，禾黍油油。彼狡童兮，不與我好兮！』所謂狡童者、紂也。」

36 周代の天子が統率する六軍。『書』康王之誥「張皇六師、無壞我高祖寡命。」護送車。犯罪者を収監したり、猛獸を運ぶ車。『史記』陳丞相世家「噲受詔、即反接載檻車、傳詣長安。」

37 生命が細い糸や毛髪に引つかかっているように、極めて危うい状況であることを指す。『後漢書』劉茂傳「臣為賊所圍、命如絲髮、賴茂負臣逾城。」

38 古代の五刑の一つで、死刑をいう。『書』呂刑「大辟疑赦、其罰千鍰。」孔傳「死刑也。」孔穎達疏「〔釋詁〕云、辟、罪也。死是罪之大者、故謂死刑為大辟。」

39 死刑を減らす。漢・荀悅『漢紀』高祖紀四「〔趙王〕無藩國之義、減死可也、侯之過歟。」

40 唐朝を指す。宋・文天祥・平原詩「唐家再造李郭力、若論牽制公威靈。」

41 唐憲宗元和十二年（八一七）淮西藩鎮吳元濟を蔡州で打ち取った前後五年に及ぶ戦争をさす。吳元濟は長安で斬首された。韓愈「平淮西碑」がある。

の刑にしたことと異なっている。

十五夜書所見 十五夜 見る所を書す（十五夜の名月の夜、見たままを記す）

山堂月上雨晴時 山堂<sup>43</sup> 月上て 雨晴るる時  
促得山人閑適詩 促し得り 山人<sup>44</sup> 閑適の詩

玉兔應嫌吟筆陋 玉兔<sup>45</sup> 応に嫌ふべし 吟筆<sup>46</sup>の陋  
故妝奇彩入雲帷 故に奇彩を妝て 雲帷に入る （上平四支・時、詩、帷）

山中の隠居所に月が上り雨が止んだ頃、その情景は隠居して山中に過ごす私を促して静かでのどかな生活を詠んだ詩を作らせた。月はきつと、私のまづい詩作を嫌ったのだろう。ことさらに美しい光を身に纏いつつ、雲のとばりに隠れてしまった。

己巳重陽 己巳<sup>47</sup>重陽<sup>48</sup>（明治二年の重陽の節句）

43 山中の寺院。唐・王勃・益州綿竹縣武都山淨慧寺碑「春巖橘柚、影入山堂。」

44 山中に隠居する士大夫。南朝・齊・孔稚珪・北山移文「蕙帳空兮夜鶴怨、山人去兮曉猿驚。」

45 月を指す。唐・韓琮・春愁詩「金烏長飛玉兔走、青鬢長青古無有。」

46 詩を書く筆。詩人の筆。宋・梅堯臣・李少傅鄭圃佚老亭詩「春禽時弄吭、清景付吟筆。」

47 明治二年（一八六九）、菊池溪琴は、七二歳。  
48 『海莊遺稿』では、「兒孫繞膝家人賀」を「繞膝兒孫皆獻壽」に作り、「七十好重陽」を「七十二重陽」に作る。

罷官歸在碧山鄉 官を罷め 歸りて碧山郷に在り  
籬落蕭條野菊香 籬落<sup>49</sup> 蕭條<sup>50</sup> 野菊香る  
兒孫繞膝家人賀 兒孫<sup>51</sup> 膝を繞り<sup>52</sup> 家人賀す  
吾生七十好重陽 吾生 七十 好重陽 (下平七陽・郷、香、陽)

官吏を辞めて故郷(和歌山県有田)に帰り、緑なす山々に囲まれた土地に住む。家の生垣は佗しく疎らで、野菊が香りを放っている。子や孫が私の世話をしてくれ、家族は祝福してくれる。私は七十歳まで長生きし、この素晴らしい重陽の節句を迎えられた。

九月十九日携兒孫遊有水三首 其一 九月十九日 児孫を携て有水に遊ぶ(九月十九日、子や孫を連れて有田川<sup>ありた</sup>まで出かけた)三首 其の一  
桃花洞口問迷津 桃花 洞口 問ふに津に迷ひ  
慚為晉人追後塵 慚づ 晉人の為に 後塵を追ふを  
九月江南好風景 九月 江南 好風景

49 生垣。晉・葛洪・抱朴子自敘「貧無僮僕、籬落頓決。荆棘叢於庭宇、蓬莠塞乎階甍。」  
50 佗しく寂れた様子。『楚辭』遠遊「山蕭條而無獸兮、野寂寞其無人。」  
51 子孫。また、一般的に後代を指す。北齊・顔之推『顔氏家訓』音辭「非唯音韻舛錯、亦使其兒孫避諱紛紜矣。」  
52 膝下を取り囲む。子供が父母に使える様子を形容する。『花月痕』第十一回「間至後堂、團圓情話、兒童繞膝、婢僕承顏、轉把癡珠一腔的塊磊、漸漸融化十之二三。」

一家行樂氣成春 一家 行樂 氣 春を成す(上平十一真・津、塵、春)

桃花洞の入り口を探し求め、人に尋ねたが結局見つからず、東晋・陶淵明「桃花源記」の漁師に及ばないことを恥ずかしく思った。有田川の南の地はこの九月、本当に素晴らしい景色で、我が一家の行樂は秋であるにもかかわらず、春のような賑わいとなった。

其の二<sup>53</sup>

白蘋紅蓼夕陽迷 白蘋<sup>54</sup> 紅蓼<sup>55</sup> 夕陽に迷ふ  
半日閑遊十日隄 半日 閑遊 十日隄  
石鼎烹茶雲未熟 石鼎<sup>56</sup> 茶を烹<sup>57</sup> 雲未だ熟さず  
孤舟流入石潭西 孤舟<sup>58</sup> 流て石潭<sup>59</sup>の西に入る(上平八齊・迷、隄、西)

53 『海莊遺稿』では、「十日隄」を「十里堤」に作る。  
54 水中の浮草。南朝・宋・鮑照・送別王宣城詩「既逢青春獻、復值白蘋生。」  
55 蓼の一種。多く水辺に生え、花は淡紅色である。唐・杜牧・歙州盧中丞見惠名醞詩「猶念悲秋更分賜、夾溪紅蓼映風蒲。」  
56 陶器の茶道用具。北周・庾信・周柱國大將軍拓拔儉神道碑「居常服翫、或以布被、松床盤案之間、不過桑杯、石鼎。」  
57 茶を煮る。漢・王褒「僮約」「臛芋膾魚、烹繁烹茶。」  
58 孤独な船。晉・陶潛・始作鎮軍參軍經曲阿作詩「眇眇孤舟遊、綿綿歸思紆。」  
59 岩に囲まれた深い瀬。北魏・酈道元『水經注』潁水「陽早輟津、而石潭不耗、道路游憩者、惟得餐飲而已。」

白い浮き草も赤い蓼も、夕陽に照らされて赤くなり、区別がつかない。半日ゆったりと船を有田川に浮かべ十日隄のあたりで過ごした。石の鼎で茶を沸かしていると、まだ湯気も出ないうちに、我々の船は流されて石潭の西側へと入っていった。

### 其の三

兒孫繞膝坐吟詩 兒孫 膝を繞り 坐に詩を吟ず

蓬底微風裊釣絲 蓬底<sup>60</sup> 微風 釣絲を裊らす

枯柳洲頭看洗馬 枯柳<sup>61</sup> 洲頭 馬を洗ふを見る

水邨山郭賽神時 水邨<sup>62</sup> 山郭<sup>63</sup> 神を賽する<sup>64</sup>時（上平四支・詩、絲、時）

子や孫が膝の周りに纏い付く中、漫然と詩歌を吟詠して過ごしていたが、船の覆いの下にかすかに風が吹き、釣り糸が揺れる。眺めやると、枯れた柳のある中洲のほとりで一日の仕事を終えた馬を洗っているのが目に入り、川辺の村や山の中の集落ではこれからちょうど祭りの時期である。

60 「蓬」に同じ。船の上部の覆い 前蜀・李珣・南郷子詞「誰同醉、纔卻扁舟蓬底睡。」

61 枯れた柳樹、柳の老木。唐・李頎・題盧五舊居詩「悵望秋天鳴墜葉、巘岈枯柳宿寒鷗。」

62 水辺の村落。唐・杜牧・江南春絕句「千里鶯啼綠映紅、水村山郭酒旗風。」

63 山村。唐・杜甫・秋興詩之三・「千家山郭靜朝暉、日日江樓坐翠微。」

64 神を祭ってもてなす。唐・張籍・江村行「一年耕種長苦辛、田熟家家將賽神。」

聞五瀨某赴任備中賦此遙寄 五瀨某の任に備中<sup>65</sup>に赴くを聞き此を賦し遙に寄す

月落樓前海鹿啼 月落ち 樓前 海鹿啼く

海天秋思夜潮迷 海天の秋思<sup>66</sup> 夜潮迷ふ

故人今夜空相憶 故人 今夜 空く相憶ひ

夢繞雲濤西又西 夢は繞る 雲濤 西又た西（上平八齊・啼、迷、西）

夜も更けて、月は西に傾いた頃、樓閣の前ではアシカが鳴いている。海のかなたの水平線を眺めると、夜になって満潮になる頃、秋の寂しい気持ち募る。我が友人である五瀨どののことを今夜夢の中で、虚しくも思い出す（会うことはできない）。夢の中であなたの居られるあたりへ、雲のような波をこえて、西へ西へと進んでいく。

晚秋偶得寄示家霞峰 晚秋 偶たま得たり 家の霞峰<sup>67</sup>に寄示す<sup>68</sup>

65 旧国名の一つ。山陽道に属し、現在の岡山県の西部。古く吉備国の一部。備州。

66 秋の寂しい思い。唐・沈佺期・古歌「落葉流風向玉臺、夜寒秋思洞房開。」

67 菊池海莊『海莊遺稿』一〇五丁表に「乙亥秋日。族人霞峰、子靖齋見贈古式烏帽。……」

68 送って示す。宋・蘇軾・與蔡景繁書之六「大篇或可追賦、果寄示、幸甚幸甚。」

君恩新賜看山福 君恩<sup>69</sup> 新たに賜ふ 山を看る福  
歸臥南山舊書屋 歸臥<sup>70</sup>す 南山<sup>71</sup> 舊書屋<sup>72</sup>  
薄酒微醺不須扶 薄酒<sup>73</sup> 微醺<sup>74</sup> 扶くるを須ひず  
先生獨訪隣園菊 先生 獨訪す 隣園の菊(入聲一屋…福、屋、菊)

陛下のご恩を新たに賜り、隠居して山々を見る幸福を手に入れた。こうして故郷に帰り、南山の麓で古い書斎の中にいる。薄い酒を飲んで少しよったが、助け起こす必要はない。わたしは、一人で隣の庭の菊を訪ねに行くとしよう。

南遊東瀨見善水 南遊して瀨見善水<sup>75</sup>に東す  
路傍敗菊晚香殘 路傍の敗菊 晚香<sup>76</sup>殘す

69 君主の恩恵。  
70 官を辞して帰郷する。唐・韓愈・順宗實錄二「(賈耽、鄭珣瑜)二相皆天下重望、相次歸臥。」  
71 広く南向きの山を指す。晉・陶潛・飲酒詩之五「採菊東籬下、悠然見南山。」  
72 書斎。唐・王建・書贈舊渾二曹長詩「替飲航籌知戶小、助成書屋見家貧。」  
73 味の薄い、強くない酒。接客の至らぬ様を謙遜する言葉。『史記』禮書「大饗上玄尊而用薄酒、食先黍稷而飯稻粱、祭饗先大羹而飽庶羞、貴本而親用也。」  
74 ほろ酔い。『宋史』邵雍傳「且則焚香燕坐、晡時酌酒三四甌、微醺即止、常不及醉也。」  
75 『日本人名大辞典』瀨見善水 せみーよしお…一八二七—一九二二 幕末—明治時代の歌人。文政一〇年生まれ。紀伊日高郡(和歌山県)の大庄屋。本居内遠、伊達千広らについて和歌をまなぶ。明治二年和歌山藩少参事、一二年和歌山県会議員となった。明治二五年一月一三日死去。六六歳。通称は彦右衛門。号は翠湾、鳥岳山人。  
76 菊花を指す。宋・韓琦に「且看黄花晚節香」句に基づく。

落日青烟結暮寒 落日<sup>77</sup> 青烟 暮寒を結ぶ  
數里青山紅葉底 數里 青山 紅葉の底  
風流野客訪清官 風流<sup>78</sup> 野客<sup>79</sup> 清官<sup>80</sup>を訪ふ(上平十四寒…殘、寒、官)

道端の枯れた菊は、晩秋の香りも損なわれ、夕日の中、青い霧が年末の寒さを閉じ込めている。数里にわたる青い霧のかかった山の紅葉の下で、風流人である村人の私は清廉な政府高官である瀨見善水どのを訪問する。

淨國寺觀亡友梁星崑夫妻詩画幅二首 其一 淨國寺にて亡友梁星崑<sup>81</sup>夫妻の詩画幅を観る二首 其の一

77 夕陽。また、夕焼け。南朝・宋・謝靈運・廬陵王墓下作詩「曉月發雲陽、落日次朱方。」  
78 世俗的でない優雅さ、上品。『後漢書』方術傳論「漢世之所謂名士者、其風流可知矣。」  
79 田舎の人。多く隠者を指す。唐・杜甫・枏樹為風雨所拔嘆詩「野客頻留懼雪霜、行人不過聽竿簾。」  
80 清廉潔白な官吏。『晉書』劉頌傳「約己潔素者、蒙儉德之報、列於清官之上。」  
81 『ブリタニカ国際大百科事典』梁川星崑…やながわせいがん(一七八九—一八五八)。江戸時代後期の漢詩人。名、孟緯。字、公図。一九歳のとき江戸に出て山本北山の奚疑塾に学び、先輩詩人と交わって詩才を認められた。その後各地を遊歴して菅茶山や頼山陽らと詩文をかわし、「文の山陽、詩の星崑」とうたわれた。天保五(一八三四)年再び江戸に帰って神田お玉が池に玉池吟社を開き、後進を指導しながら江戸の詩壇に新風を起した。弘化二(一八四五)年に京都に移り、勤王の志士たちと討幕運動に従事したが、安政の大獄の直前に急死。初め北山の説を奉じ宋詩を範としたが、のち唐詩を信奉し、さらに明、

泫然涙下舊時親 泫然<sup>82</sup> 涙だ下る 舊時<sup>83</sup>の親  
 故人玉骨沒風塵 故人 玉骨<sup>84</sup> 風塵<sup>85</sup>に没す  
 三樹陂頭明月夜 三樹<sup>86</sup> 陂頭 明月の夜  
 鶴悲梅瘦不成春 鶴悲しみ 梅瘦 春を成さず(上平十一眞・親、塵、春)

旧時の親友であつた梁川星巖のことを思い出して涙が流れる。優れた才能をもつ彼は幕末の動乱の中で亡くなった。絵には、安政の大獄で獄死した、星巖の弟子である頼三樹三郎を連想させる三本の樹木が植わつた土手のほとりの名月の夜が描か

清の詩風を学んで清新な詩風を鼓吹し、特に七言律詩に長じていた。また妻の紅蘭も閨秀詩人として名高い。『星巖集』、『星巖先生遺稿』などがある。

『美術人名辞典』梁川紅蘭やながわこうらん…画家。名は景婉、字道華、号紅蘭亭。星巖の室。自ら張氏と称す。美濃の人。聡明にして詩文をよくし、中林竹洞に画を学んで山水花卉をよくした。常に星巖に随つて諸国の山川の勝を探り一対の好夫婦と賛えられた。頼三樹三郎等の志士が出入したため幕吏の疑うところとなり安政の大獄には星巖は己に歿していたものの紅蘭は投獄されたが遂に正義をつらぬき許された。明治十二年(一八七九)歿、七六才。

82 涙の流れる様。『禮記』檀弓上「孔子泫然流涕曰…吾聞之、古不脩墓。」

83 過去、昔日。『後漢書』東平憲王蒼傳「開饗衛士於南宮、因閱舊時衣物。」

84 瘦せて美しい体つき。多くは女性の体の形容。唐・李商隱「偶成轉韻七十二句贈四同舍」天官補吏府中趨 玉骨瘦來無一把。

85 風に巻き上げられた土埃。戦争や騒乱、俗世間を指す。漢・焦贛『易林』坎之咸「風塵暝迷、不見南北、行人失路、復反其室。」

86 美術人名辞典…頼三樹三郎らいみきさぶろう…幕末の志士・儒者。京都生。頼山陽の三男。名は醇、字は子春、別号に鴨屋等。後藤松陰・篠崎小竹・佐藤一斎・梁川星巖らに学ぶ。尊攘論を唱え、星巖・梅田雲浜らと国事に奔走。安政の大獄に連座した。安政六年(一八五九)歿、三五才。

れ、鶴は悲しみ、柳はやせ衰え、喜ばしい季節の春となつていない。

## 其の二

横斜影没月如煤 横斜<sup>87</sup> 影没して 月煤の如し  
 三樹陂頭暮笛哀 三樹 陂頭 暮笛哀しむ  
 苦節唯將殘墨寫 苦節<sup>88</sup> 唯だ殘墨を將ちて寫すのみ  
 一生不復畫紅梅 一生 復た紅梅を畫かず(上平十灰…煤、哀、梅)

画中では、梅の木の横に伸びた枝の影も、月が煤のように暗くなったため闇の中である。画中の三本の樹木が植わつた土手のほとりに、年末の笛の音は哀しく響く。梁川星巖の夫人は節操を固くまもり志を貫徹する中、磨り減つた墨を擦って、梅花を描き、一生二度と紅梅を描かなかつた。

## 呈瀨見善水 瀨見善水に呈す

環海杞憂日夜深 環海<sup>89</sup> 杞憂<sup>90</sup> 日夜深し

87 横になつたり斜めになつたり。多く梅や竹など花木の枝や影を形容する。宋・林逋『山園小梅』詩「疏影横斜水清淺、暗香浮動月黃昏。」

88 『易』節「節」亨。苦節、不可貞。本来は、甚だしく儉約することを目指したが、のちに、節操を固く守り、志を失わないことを言うようになった。

89 天下。『晉書』涼武昭王李玄盛傳論「覆實創元天之基、疏涓開環海之宅。」  
 90 「杞人憂天」の略語。不必要的な憂慮。『列子』天瑞「杞國有人、憂天地崩墜、身亡所寄、廢寢食者。」

與君相遇話幽襟 君と相遇ひ 幽襟<sup>91</sup>を話す  
翠灣秋水明如鏡 翠灣 秋水<sup>92</sup> 明らかなること鏡の如し  
照出布衣一片心 照出す 布衣<sup>93</sup> 一片の心(下平十二侵・深襟、心)

世間は無駄な心配をして、日々、それは深まっている。あな  
たとお会いして我が胸の内を明かそう。秋になって湾は緑の水  
をたたえ、鏡のようである。それは官職についていないわたく  
しの心を映し出したようだ。

福井老公索詩書此上左右 福井老公<sup>94</sup> 詩を索るに此  
を書して左右<sup>95</sup>に上る

海曲秋高悲水煙 海曲<sup>96</sup> 秋高<sup>97</sup>く 水煙<sup>98</sup>を悲しむ

91 心の中に隠れた情感。唐・杜甫・奉觀嚴鄭公廳事岷山沱江圖畫詩「繪事功  
殊絶、幽襟興激昂。」

92 秋の川水、湖水、雨水。『莊子』秋水「秋水時至、百川灌河。」

93 一般人。『荀子』大略「古之賢人、賤為布衣、貧為匹夫。」

94 『日本人名大辞典』松平慶永まつだいらよしなが・一八二八・九〇 江  
戸時代後期の大名。文政一一年九月二日生まれ。田安斉匡の八男。松平齊善の  
養子となり、天保九年越前福井藩主松平家一六代。中根雪江らを登用して藩政  
の改革をすすめる。將軍継嗣では一橋慶喜を擁立。安政五年大老井伊直弼と対  
立して隠居謹慎となる。文久二年政事総裁職について公武合体につとめる。明  
治二年民部卿兼大藏卿。三年すべての公職を辞した。明治三年六月二日死去。  
六三歳。号は春岳、礪川。越前守。著作に「逸事史補」など。

95 手紙文で相手方を指す言葉として用いられる。漢・司馬遷「報任少卿書」是  
僕終已不得舒憤懣以曉左右。」

96 海の湾、入り海。晉・陸機・齊謳行「營丘負海曲、沃野爽且平。」

97 秋の空が晴れ渡って澄みきった様子。唐・杜甫・茅屋為秋風所破歌「八月  
秋高風怒號、卷我屋上三重茅。」

巴歛歌起月明前 巴歛<sup>99</sup> 歌起る 月明の前  
蘆花撩亂風吹去 蘆花<sup>100</sup> 撩亂<sup>101</sup>として 風吹き去る  
飛上九重臺閣邊 飛び上る 九重<sup>102</sup> 臺閣<sup>103</sup>の邊(下平一先・  
煙、前、邊)

秋の澄み切った空の下、海に面した湾に霧がかかるように、  
いま世情は不穏な状況となったことを悲しく思う。世間では、  
巴渝地区の武人の歌のような勇ましい武士の歌声が月あかりの  
下で沸き起こっている。強く風が吹き水辺の葦の花は乱れ、吹  
き飛ばされた花は天子のおられる宮中の建物のあたりまで達す  
ほどである。(世の中の激しい変化は人々の生活をかき乱し、  
その余波は天子様のところまで聞こえている)

再登紀三井寺大悲閣二首 其一 再び紀三井寺<sup>104</sup>の大

98 水面の霧。南朝・梁簡文帝・登烽火樓詩「水煙浮岸起、遙禽逐霧征。」

99 巴渝舞或いは巴渝歌を指す。漢・桓寬『鹽鐵論』刺權「鳴鼓『巴歛』、作  
於堂下」。巴渝舞は、中国古代の巴・渝地域の民間武舞である。周代初期に黄  
河中流域に伝わり、軍隊の楽舞に採用された。

100 アシの綿毛。隋・江總・贈賀左丞蕭舍人詩「蘆花霜外白、楓葉水前丹。」

101 乱れるさま。唐・韋應物・答重陽詩「坐使驚霜鬢、撩亂已如蓬。」

102 禁裏、朝廷を指す。唐・盧綸・秋夜即事詩「九重深鎖禁城秋、月過南宮漸  
映樓。」

103 漢代に尚書台を指した。後に広く中央政府機構を指すようになった。『後  
漢書』仲長統傳「光武皇帝愷數世之失權、忿彊臣之竊命、矯枉過直、政不任下、  
雖置三公、事歸臺閣。」李賢注「臺閣、謂尚書也。」

104 『日本国語大辞典』紀三井寺・和歌山市紀三井寺にある救世観音宗の総本山、  
護国院の通称。寺域に三か所の霊水があるので、大津の三井寺(園城寺)に対  
して紀州の意の「紀」の字を冠したこの名がある。西国三十三所の第二番札所。

悲閣に登る二首 其の一<sup>105</sup>

吾は清平詩酒仙 吾は是れ 清平<sup>106</sup> 詩酒の仙<sup>107</sup>

大悲閣上弄風烟 大悲閣上 風烟<sup>108</sup>を弄す

慈雲漬惹養花雨 慈雲 漬らく惹べし 養花の雨

載酒又浮春水船 酒を載せ 又た浮ぶ 春水の船 (下平一先)

仙、烟、船)

私は唐の玄宗皇帝の平和な世を「清平調詞」として詩に詠んだ酒好きの詩仙である李白のように、この紀三井寺の大悲閣に登って周りの風景を詩に詠もうとしている。御仏の広大な慈悲の心は、雲のように世の中を覆い、きつと花を咲かせる雨を降らせるであろう。花が咲いたら、私は、また船に酒を乗せて、春の海(和歌の浦)に浮かべ船遊びをしよう。

其の二<sup>109</sup>

時平萬物共昭昭 時平<sup>110</sup> 萬物 共に昭昭<sup>111</sup>

105 『海莊遺稿』では、「再登紀三井寺大悲閣」を「紀三井寺大悲閣書懷」に作り、「漬惹」を「已惹」に作り、「載酒又浮」を「喚友好浮」に作る。

106 清平調は、唐の大曲の名で、唐の開元年間、李白が翰林供奉であった時、玄宗皇帝が、楊貴妃と共に芍薬を鑑賞し、李白に命じて、新しく清平調に歌詞をつけさせたと伝えられている。唐・李潜『松窗雜錄』、宋・王灼『碧雞漫志』卷五。

107 詩仙は、唐代の詩人李白を指す。李白は、賀知章から「謫仙人」と呼ばれたので、後世、李白を詩仙と呼んだ。宋・楊萬里・望謝家青山太白墓詩「六朝陵墓今安在? 只有詩仙月下墳。」

109 108 景色。唐・駱賓王・在江南贈宋五之問詩「風煙標迴秀、英靈信多美。」『海莊遺稿』では、「天氣」を「妖氣」に作る。

雨洗山河天氣消 雨 山河を洗ひ 天氣<sup>112</sup>消ゆ

水自含春山自笑 水は自ら 春を含み<sup>113</sup> 山は自ら笑ふ

不須詩客說蕭條 須ひず 詩客<sup>114</sup> 蕭條<sup>115</sup>を説くを (下平二蕭)

昭、消、條)

時代は平和で、すべてのものが光り輝いている。雨は山河を潤し、邪悪な気は消えてしまった。和歌の浦の水面は春景色を映し出し、山は自然と笑っているかのようだ。詩人が寂しい様子を詩にする必要はない。

110 太平の世の中。南朝・梁簡文帝・南郊頌序「塵清世晏、倉兕無用其武功；運謐時平、鸛鷺咸修其文德。」

111 明らかである様子。「楚辭」九歌・雲中君「靈連蜷兮既留、爛昭昭兮未央。」王逸注「昭昭、明也。」

112 邪悪な気。漢王充『論衡』言毒「妖氣生美好、故美好之人多邪惡。」

113 春景色を含む。南朝・梁簡文帝・列燈賦「草含春而動色、雲飛采而輕來。」詩人。唐・白居易・朝歸書寄元八詩「禪僧與詩客、次第來相看。」

114 寂しく落ちぶれた様子。「楚辭」遠遊「山蕭條而無獸兮、野寂漠其無人。」